2022.04.21
長崎新聞　10面

小さな地球のパズルを解く

プラネタリーヘルス
長崎大学の挑戦
■1■

学長特別補佐（プラネタリーヘルス担当）
渡辺　知保（わたなべ　ち ほ）

「地球は大きいと思いますか」と聞かれたら、あなたはなんと答えるでしょう？　そりゃあとても大きいでしょうと直感的に答える人も、飛行機で8時間も飛べばアメリカに着くのだから意外に小さいという人もいるでしょう。

基準がないのでどうとでも答えられそうですが、最近の科学で見えてきたのは、人間活動の大きさに対比して、地球は意外と小さいということです。つまり人間のさまざまな活動が、地球にも〝爪痕〟を残すようになってきたことがわかったのです。

この爪痕の代表的なものが温暖化など気候変動で、昨年公表された気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第6次報告書は、温暖化が人間の活動のせいであるのは間違いないと言い切っています。

渡辺知保
学長特別補佐

地球は私たち人間の住みかであると同時に、他の動植物たちの住みかでもあります。プラスチックによる海洋汚染は、人間の活動が地球を相対的に小さくし、他の生き物たちの生存にも大きな影響を与えている典型的な例です。そしてこれらの〝爪痕〟は、猛暑や巨大台風、パンデミック（世界的大流行）などの形で私たちの生命・健康・財産にも跳ね返るようになってきました。

長い間、人間にとって地球は十分に大きくて、私たちはそれを使って寿命を延ばし、健康と豊かで便利な生活とを手に入れて現代の社会を作り上げました。しかし、十分に大きかった地球がいつの間にか相対的に小さくなり、成功を手に入れてきたこれまでのやり方が行き詰まっています。

今世紀のはじめ、当時の国連事務総長だったコフィ・アナンさんが世界中の専門家に呼びかけて「ミレニアム生態系評価」というプロジェクトを実施しました。ここでわかったのは、20世紀後半に人間は寿命を延ばし富を手に入れたけれど、それは自然の犠牲と引き換えだったということです。

ではどうするか？　地球を大きくするのは難しいとすれば、これまでのやり方はどこがまずいかを調べ、新しいやり方を試すしかありません。「プラネタリーヘルス」は、新しいやり方を見つけるための知識と活動の枠組みです。そのまま訳せば「地球の健康」ですが、地球とその上に乗っている生態系の健康と、その生態系の一部でもある人間と人間の社会の健康を意味します。大切なのは、この二つの健康は相互に影響を及ぼしあっており、自然の健康が失われれば、人間もその社会も失われることです。

プラネタリーヘルスという言葉は、2015年にランセット」という有名な学術雑誌から世の中にデビューしました。長崎大学では20年に、大学を挙げてプラネタリーヘルスの実現に挑戦すると学長が宣言しました。実は長崎大学の宣言はランセットとはほぼ無関係に始まったのですが、結果として両者の目指すところは「地球の健康」の実現、言い換えれば現代社会の多様な課題をみんなで知恵を出し合って解決し、新しい世界を創っていこう、という点で一致しています。

プラネタリーヘルスは、持続可能な社会の構築を目指すSDGsとどこが違うのかと思う人もいるでしょう。SDGsでは、本来17のゴール全てに気を配らなければなりませんが、実際には一部の目標だけ選んで取り組む場合が多くなります。飢餓を解消するために森林を切り開いて農地に転用したとしましょう。この場合、生物の多様性や二酸化炭素の吸収にはネガティブな影響が及ぶかもしれません。プラネタリーヘルスは、自然と人間の社会との間の関係を明らかにし、こうした弊害を避けて進む道を見いだします。

◇

この連載では、プラネタリーヘルス実現のために考えるべきさまざまな話題が登場します。地球が小さいので、どこかで起こったできごとは、別のどこかに思わぬ波及効果を及ぼします。さまざまな話題がどのようにつながっているのか、想像しながら読んでみてください。そうすることで、プラネタリーヘルスが実現される未来の姿が見えてくるかもしれません。

（原則毎月第3木曜日付、地方版に掲載します）

長崎大学×Planetary health
（長崎大学ホームページ）